

ルターから今を考える

——キリスト教史における臨終の伝統とルターの死の理解を手がかりに^①

小田部 進一

一 はじめに

宗教改革の神学が形成される土壌となった経験の場として「死への準備」がある。宗教改革者ルターの死の経験、さらに遡ってルターが生前に語った死の理解を通して、ルター神学の徹底した受動性の特徴がよく理解できる。そして、そのことは、ルターの営みをキリスト教史における臨終の儀礼の歴史の中に位置づけると、より明らかとなる。ルターは中世後期の伝統を継承し、またそれと対峙する中で宗教改革的な臨終の理解を生み出し、実践していったからである。

本稿では、まず伝承されたルターの死に臨む経験の内容を確認する。そこには、後の考察で言及されることに

もなるルターにおける伝統との連続と断絶が垣間見られる。次に、ルターの臨終理解を深めるために、近年の研究を手がかりにしながらキリスト教史の臨終の伝統を概観する。その際、古代から中世にかけては、そもそも臨終の儀礼が生じる背景を一瞥するにとどめ、中世後期の臨終の文化に対するルターの連続性と断絶を主な考察の対象とする。これらの考察を元に、最後に、現代的な問いかけについて考えることを試みる。この問いかけは、研究成果のまとめというよりは、本稿が広い対象に開かれた講演会という文脈で執筆されたこともあり、むしろ、臨終をめぐる議論との関わりの中で、ルターの経験と現代社会に生きる人間の経験の対話を試み、今日の人間のあり方を展望することを意図している。

二 ルターの生涯と転機―突然の死の不安の経験

1 ルターの最後のことは

一五四六年二月一八日、宗教改革者マルイティン・ルターは、その最期を旅先のアイスレーベンの町で迎えることになった。⁽²⁾ その日は多くの場合がそうであるように、ルターにとつても突然にやってきた。幸い、アイスレーベンに同行し、ルターの死を看取った同僚たちの証言が残されているので、ルターがどのように最後の時を迎えたのか知ることができる。⁽³⁾ 同僚の必死の看病と回復への期待にもかかわらず、ルターは自分の死を確信し、

不安を正直に告白している。

では、旅の途上に突然に彼を襲った死の不安に直面して、ルターには何ができたのか。報告によれば、ルターにできたことは信仰を聖書の言葉によって告白し、そのすべてを神にゆだねることだけであった。例えば、ルターは、ヨハネ福音書三章一六節（「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」）、詩編三二編六節（「まことの神、主よ、御手にわたしの霊をゆだねます。わたしを贖ってください」）、詩編六八編二二節（「この神はわたしたちの神、救いの御業の神、主、死から解き放つ神」）を唱えている。⁽⁴⁾ ルターが最後に短く意識を吹き返した機会を捉え、ユストゥス・ヨナスとミヒヤエル・コエリウスがルターに、「キリストへの信仰において死に、その救いを堅く守りますか」と呼びかけると、その時だけは、はっきりとした声でルターは返事をしている。「はい」⁽⁵⁾。福音主義的信条に対する信仰告白、これが証言者の報告によるルターの最後のことばである。

同僚たちが残した報告から気づかされることは、ルターの死の記憶が、宗教改革者の言葉に集中していることである。ルターの時代に作成された死に臨む人をモチーフにした絵画の多くには、悔い改め、聖餐、塗油のサクラメント、サクラメントを執り行なえる司祭、また、死に臨む人のために執り成し、庇護する天上の聖人たちが描かれていた。それに比べて、ルターの臨終に関する報告には、そのような教会的・宗教的儀礼が一切報告されていない。

2 旅の途上における突然の死の不安

ルター個人の生涯に注目したとき、自覚的にキリスト教的な信仰を生きたその生涯の「はじめ」にも「おわり」にも、「突然の死の不安」を経験していることが分かる。はじめの経験は、若きルターが修道院に入る契機となった落雷体験であった。これらの突然の死の不安は、いずれも旅の途上での突然の出来事として経験されている。そして、宗教改革者ルターの生涯におけるこれらの転機の記憶と想起は、ルターが向き合った人間の問題の核心を浮き彫りにしている。ルターは、この突然の死の不安に、その時々には彼が拠り所としていた宗教的理解に基づいて立ち向かった。

落雷による突然の死の恐怖を経験したとき、ルターは、最後の審判を究極的な定位点として人を裁き罰する神の眼差しの前で、いかにして義しい人である得るのかが常に問われる宗教的な世界に生きていた。人生の最後に、審判者の前で自分の存在根拠を問われ、自分の行いによって永遠に存在に価する者であることを証明するのとが求められる世界である。ルターは、それを「能動的な義」と呼んでいる。そして、修道院での生活の中にこの能動的な義の世界の理想を見出した。だからこそ、ルターは、修道士の誓願を立て、修道生活を実践することを通して、このような宗教的要求に耐えることができる最善の道、最も確かな道を歩むことを決心したのである。そして、能動的な義の宗教性が問題視され、それに対する宗教改革的神学の形成が行われたとき、これらの神学的思考の土壌となっていた人間経験の場が「死への準備」であった。しかし、そもそも、キリスト教の歴史

において「死への準備」の伝統はどのように形成され、変化してきたのであろうか。以下に、マインツ大学の歴史神学教授ウルリッヒ・ボルプが編著者である『死』（二〇一八年）を参考にしつつ、古代と中世におけるキリスト教と死への準備の特徴を概観し、中世後期とルターの考察へと橋渡しする。⁽⁶⁾

三 キリスト教と「死への準備」

1 古代教会と臨終の儀礼

キリスト教史を遡っていくと、キリスト教はそのはじめから死の問題と向き合ってきたことが分かる。ただし、ここでの関心は、キリスト教徒が自らの死や他のキリスト教徒の死とどのように向き合ってきたのかという問題に限る。古代教会時代の死の描写の典型として挙げられるのが殉教者の死の報告であり、それはイエス・キリストの十字架を負う死として理解されることがあった。⁽⁷⁾ 臨終の描写が詳細になって行くのは、迫害が終わった時代からである。ボルプは、ニュッサのグレゴリオス（三三五頃—三九四年以降）が伝える妹マクリナの臨終の祈り、⁽⁸⁾ アウグステイヌスによるある若者の死の報告、⁽⁹⁾ そしてアウグステイヌスの死についての報告などを例に挙げている。⁽¹⁰⁾ そこに共通して見られることは、詩編（聖書）を通して神に祈るという態度である。詩編（聖書）と神への祈り、この二つの要素はルターの臨終の部屋にも見られた。殉教者の死、そして教父や聖人たちの死の報

告内容が、キリスト教徒の死の準備の模範とされていた。

その後、臨終の儀礼が発展していくのであるが、その発端に「臨終における悔改め」の問題がある。この問題は、古代教会では煉獄の觀念なしに洗礼をめぐるその時代の神学的問題の文脈の中で発展していった。つまり、洗礼後に生じる罪とその赦しの問題である。⁽¹⁾死ぬ間際まで待つて臨終の直前に洗礼を受けることがよい問題解決だと思われることもあり、コンスタンティヌス大帝の洗礼に関する伝説だけでなく、臨終の場で「サクラメント」が実施されるようになったということが特筆される。暗誦した聖書、詩編を唱え、神に祈ることが「死への準備」の中心であった場所に、サクラメントが登場し、死への準備のための儀礼の実践に門戸が開かれた。臨終の場に、聖餐のサクラメント、悔い改めのサクラメント、さらには終油の儀礼等が加わるようになったのである。⁽²⁾

2 中世と「死への準備」

古代教会の時代に「死への準備」の儀礼が出現し、発展しはじめたとすれば、中世は、その豊饒化の時代と言える。一一世紀に遡る「アンセルムスの問い」には、司祭が臨終の場で語りかける問いが反映されている。「その中で、死に臨む人の信仰と敬虔が問われるのであるが、特に、悔い改めと感謝を述べる機会が与えられる。罪の赦しの約束と共に、伝承されたテキストには、キリストに信頼すべきであるという詳細な勧告が含まれている」⁽³⁾。ちなみに、ルター（15）の臨終の場でも、問いかけがなされているが、そこでは「キリストへの信頼」という信

仰の確かさを信仰者ルター自身が告白することが中心となっていた。さらに一四世紀にはジェルソンに代表される『死の技法 (ars morienti)』がベストセラーとなった。そこには、アンセルムスの問いのテキストに見られた臨終に関わる勧告がさらに拡張された仕方です。さらに詩編三一編六節に倣うルカ二三章四六節をはじめ、マリアや聖人たちへの祈りが含まれている¹⁴⁾。また、『死の技法』のテキストに挿絵が付加されることで、臨終を看取る人や死に臨む人が取るべき行為についての情報が視覚的に示され、実践的な性格が強められた。こうして、臨終の場で、ヤコブ五章一四節以下にある病人への塗油に基づく終油が行われ、罪の告白と赦し、そして聖餐のサクラメントといった詳細に区別され、秩序づけられた儀礼が形成されていく。つまり、悔い改めの詩編、悔い改めの儀礼、祝福、聖水の儀礼、灰の散布、塗油、聖餐式と続く。これらの儀礼が終わった後にも、まだ臨終を迎えない場合には、その時がくるまで、間を置いて、繰り返してこれら一連の儀礼が行われた¹⁵⁾。ルターの臨終では、彼自身が聖書の言葉による神への祈りを繰り返して唱えていた。

この関連でボルプが、「これらの儀礼的な同伴が儀礼理論的な視点から有益であればあるほど、しかし、これらのサクラメント的な準備なしに突然の死を迎えることに対する大きな不安をもたらしものとなった」と指摘している点が注目される¹⁶⁾。なぜなら、そこから、この「突然の死の不安」を補うためのさらなる実践が重要視されていた背景が理解されるからである。臨終の儀礼の豊饒化は「死への準備」に留まらず、「すでに死を迎えた魂の養い」に必要な霊的な宝を獲得する様々な儀礼的行為としても展開していった。行為の主体も、臨終に臨む当事者から残された遺族やその行為を任された人々に広がっていくこととなった。結果として人々に安寧が訪れたかという点、実態はその逆で、死者の魂のための寄付行為や儀礼の実践が盛んになればなるほど、事前の十分

な準備ができていない時に、「突然の死に対する恐れ」を強めることになったとボルプは指摘している。⁽¹⁷⁾ 不安を宥めるはずの諸儀礼が、不安を増強する効果を常に含んでいたのである。不安の解決を、その原因である人間の側の行為で解決しようとする限り、この問題を根本的に解決することは不可能であったからである。

四 中世後期とルターの連続と断絶―外にある聖性との関わり

中世後期の「死への準備」は、キリスト教的な道徳の完全を目的としていた。そこでは、人生が最後の審判を定位点とした完全な聖性を目指して向上していくプロセスとして理解されている。したがって、そのような態度は臨終の時にのみ問われるものではない。しかし、臨終の時はキリスト教的な道徳の完全化の頂点、そして十分な功績と贖罪が成し遂げられる到達点として位置づけられた。そして、その時点で要求されていることが満たされているかどうかによって「その後」が決まる、人生における決定的な「転機」であった。それゆえ、中世後期は、この転機を無事に終えるための作法や儀礼で満たされていたのである。この人生の極みへの対処に熟練するための手引きとして人気であった出版物が上述した往生術とも言われる「死の技法 (*ars moriendi*)」であった。

臨終という場は、臨終を迎える人が、外的・能動的な活動によってその人自身の人生の形態化に参与することができないという特徴がある。つまり、人間の生の形態化の営みは、その人生の極みにおいて、徹底して受動的な性格を持つものとなる。この人間学的な問題は、中世後期の「死への準備」の態度の中にも、ルターの臨終理

解と実践の場（ルターの死）にも観察される。しかし、そこには連続性だけでなく、飛躍があることが確認されるとき、宗教改革的な思想の特質が明らかになる。エアランゲン大学神学部 of 歴史神学教授であったベルント・ハムが、まさにこの点について「私たちの外にある聖性 (Extra-nos-Heiligkeit)」及び「私たちの外に依拠するアイデンティティ (Extra-nos-Identität)」という概念を用いて神学的な考察を行っている。そこで、ここでは、このハムの研究を手がかりに、中世とルターの連続性と断絶について考察を進める。⁽¹⁸⁾

1 中世の「死への準備」の特徴

ハムは、中世後期の神学者たちが「成功する死」を「外側にある庇護する力の圏域」に組み込まれたものとして理解していたことが、「死の技法」の伝統の中心に助けと憐みを求める祈りがあるという点に示されていると指摘し、その圏域のことを「私たちの外にある聖性」と表現している。⁽¹⁹⁾そして、人間の内面とこの外側にある庇護圏域とを結びつけるものが悔い改めである。悔い改めは、人間がその内面において謙遜になることへと導く。この内的謙遜さの態度は、自分が天の報酬に全く相応しくないことに気づかせ、むしろ、代理、仲裁、憐みに全面的に頼ることへと導く。ここに自己の内面から外側へと向かう方向性がある。しかし、まさに、この内的謙遜さによって、「事実上、神の前に真の道徳性、功績的かつ贖罪的な価値」が獲得される。⁽²⁰⁾ハムは、そこに伝統的な協働モデルを見ている。「死の技法に典型的なことは、つまり、恩恵豊かな庇護者の積極的な近さも、人間の内的な良心と心情の形成も、臨終の時に頂点へと到達させ、そして両者を集中的に結びつけることである。そこ

に、一種の伝統的な協働モデル、つまり、一種の天国の救いを目指す人間主体と神の協働を認識できる。もちろん、死に臨む人の協働は、外的行為の次元から解放され、内的同意による愛と信頼の行為として理解されるだけであるが⁽²¹⁾。しかも、人間の側の自発的な準備が救いの準備の条件となっているため、中世後期の「死の技法」は、「自発的な準備なしに誰も救われることがない」ものとなっている⁽²²⁾。しかし、そのような論理のゆえに、「死に臨む人」の自発性の足りない部分が逆に補われることが必要とされる。さらにハムは、臨終の時への集中によって、生活領域が世俗化されることはなく、「むしろ、『この世の空虚から天の祝福に向かうより良い人生へ悔い改めよ』というスローガンによる集中的なキリスト教化の推進力が「死の技法」の全体の連関を形成している」と述べている⁽²³⁾。その際、ルターの死生観において、この世が世俗として積極的な行為の場として理解されるのとは逆であることが暗示されているのかもしれない。

2 ルターと「死への準備」

ルターが一五一九年に執筆した『死への準備』についての説教⁽²⁴⁾もまた、中世的な「死の技法」の伝統の中に位置づけられる。しかし、ここでは、宗教改革的な神学の視点から中世的な「死への準備」が捉え直されている。ここでは、このルターの著作に関するハムの研究や拙論⁽²⁵⁾を手がかりとしながら、後期中世とルターの共通点と相違点について改めて確認することを試みる。本稿では、キリスト教の臨終の文化における根本的な要素である、不安、悔い改め、サクラメントという三つの焦点に絞って考察を行う。

a 不安の強調

ルターは上記説教の六節から八節で、三つの恐れの対象、すなわち、死、罪、地獄という三つの像を挙げて
いる。すでに金子が指摘しているように、ここに、死の試練における三つの連続的な状況を理解することができ
る。⁽²⁶⁾つまり、死を目前にして、これまでの罪が想起され、そこで罪の罰、あるいは神の怒りとしての最後の審判
として地獄が意識される。死と罪と地獄という觀念が、死に臨む人を、不安と絶望へと陥れる恐ろしい力として
示されている点に、死を危険に満ちたあの世への移行の時とみなし、不安を強調する中世的な「死の技法」の伝
統との連続性を見ることができであろう。ただし、ルターの場合、この三つの恐れは、身体的な戦いによっ
ても、内面的な戦いによっても対抗できないほどに根源的なものとして理解されている。そのような意味で、ル
ターは有限な人間の「人間としての不安と絶望」と徹底して向き合っている。そして、死、罪、地獄の力がそれ
ほどまでに大きいために、次のように勧めている。

「あなたは、死を死それ自体において、自分自身において、あるいは自分の性質において、もしくは、神の
怒りによって殺された人々や、死に打ち負かされた人々において見つめたり、考えたりしてはならない。さ
まなければ、あなたは失われ、彼らとともに打ち負かされてしまう」⁽²⁷⁾

ルターはここで、死にゆく生が、死と罪と地獄においてのみ、あるいは自分自身において見られる限り、人は

自分自身に対する絶望から逃れることができないと考えている。また、死にゆく生への執着から、死後の運命に関する知識をも自らが自由に処理可能なものとして扱うことを欲し、自らが神と等しくなろうとするとき、人は己自身による閉塞状態に陥る。それゆえ、次に、この閉塞状態の打開がいかに可能であるのかが示されなければならない。

b 悔い改めにおける「私たちの外 (extra nos)」への転換

自分の側からの働きかけの不可能性が認識されるとき、救いの可能性の問いは、自分の外へと向かうことになる。ルターもまた、「extra nos」、つまり自分の外へと向かっていく。ルターにとって人が知るべきことは、「神の救いの恵みの現実へと解放する外側への関係性に自らを委ねること」であった。⁽²⁸⁾そして、ルターにも、中世的な伝統において見られた死に臨む人を庇護するものとしての「私たちの外にある聖性 (Extra-nos-Heiligkeit)」への眼差しが観察される。しかし、ハムが指摘しているように、「彼「ルター」は、この伝統を先へと進め、キリストの救済行為の効力を愛や悔い改めの能力といった人間的な質への問いから完全に切り離すことによって、この伝統を終着点へとたらしめた」のである。⁽²⁹⁾つまり、「私たちの外にある聖性」に自己を委ね、結びつける内的態度が神の前での自己の価値を最終的に高める自発的・功績的行為となるという考えは、ルターに継承されていない。ルターの場合、「extra nos」は、私たちの外から絶対的に与えられる恵みの約束を受け容れる態度に集中しており、それゆえ、「信仰のみ (sola fide)」という内的態度で表現されるべきものとなる。

ルターは、外から絶対的に与えられる恵みの約束をキリストの十字架の出来事に見ている。したがって、死

を「死において」見るのではなく、死を「キリストにおいてのみ」見ることを、あるいは、死を「十字架のキリストがあなたの罪をあなたから取り去り、それをあなたのために担い、その息の根をとめること」において見ることを勧める。⁽³¹⁾ ルターの“extra nos”におけるキリスト論的集中である。「自己をキリストにおいてのみ探究し、自己において求めるな。そうすれば、あなたは自己を永遠にキリストの内に見いだすであろう」。⁽³²⁾ 自己自身の中にはなく「キリストの中に」探し、見いだされる自己を、ハムは「私たちの外に依拠するアイデンティティ(Extra-nos-Identität)」と表現している。そして、「内から外への、つまり、自己を求めることから私たちの外に依拠するアイデンティティへと解放する転換」に、ルターにとつての「死の技法」「死への準備」のすべてがかかっているとハムは指摘する。⁽³³⁾ 言い換えるならば、能動的な義から受動的な義への転換である。ルターにおいて、悔い改めにおける「私たちの外(extra nos)」への関わりという中世後期的な枠組みは継承されているが、そこに質的な転換が遂げられているのである。

c サクラメントの価値

自己においてか、あるいはキリストにおいてか。問題は、自己自身をどこで見るのかということである。しかし、自己自身を永遠に見出すとは何を意味しているのであろうか。ルターが神のことばと価値について論じている箇所から考えてみたい。

「信仰は価値を生じ、疑いは無価値を生じる」(一六節)⁽³⁴⁾。これは、ルターが、死と罪と地獄への対抗策としてサクラメントへの信仰を推奨する文脈で語った一節である。サクラメントとは、死と罪と地獄を克服したキリス

トの生についての「目にみえるしるし」であり、「神の外的な言葉」である。⁽³⁵⁾しかし、サクラメントを受けようとするときに、悪魔があらわれ、神の恵みを受けるに相応しい価値があるかないかという考えをもたらし、己自身への疑いを起こさせる。ここで、ルターは人間の価値について二つの異なる態度を「悪魔のささやき」と「神の言葉」として対置している。

「神はあなたに、あなたの価値のゆえには何も与えることはない。神はまた神の言葉とサクラメントをあなたの価値の上に築くことはない。むしろ、全くの恵みから、神は価値のないあなたを神の言葉としるしの上に築く」。⁽³⁷⁾

悪魔のささやきは、神の恵みを受けるに値する価値を要求する。それに対し、神の言葉は「価値のゆえに」ではなく、むしろ「恵みから」価値のないところに与えられる。ハムは、中世後期の臨終のサクラメントの特徴として、「人間に徳に満ち、功績的で、贖罪的な死への準備を可能にしたり、あるいはそこに集中させたりし、その底護的作用によって補足する機能を持っている」こと、そして、「その「臨終のサクラメントの」聖性が、人間の生の聖性の最終的向上という技法構想のために用いられた」ことを指摘している。⁽³⁸⁾その上で、ルターのサクラメント理解の特徴が述べられている。「ルターの場合、それに対して諸々のサクラメントに全く反対に、試練を受ける罪人に、彼の救いがあらゆる彼自身の質、道徳性、聖性、価値のいかなる条件にも依存しない、という確信を与える役割が与えられている」。⁽³⁹⁾『死への準備についての説教』の一六節におけるルターの理解に従えば、

神の言葉、あるいはその外的しるしとして与えられるサクラメントが、己の外から絶対的に与えられている賜物として受けとめられるとき、人間を絶望へと導く死と罪と地獄の諸力は「無害なもの」となり、そうして自己の死が受容される。⁽¹⁰⁾「そこに（神の言葉に）私はとどまり、そこで私は死ぬ⁽¹¹⁾」。こうして、ハムが考察しているように、確かに一五一九年の『死への準備についての説教』の中で、サクラメントの約束への信仰というルターの神学的特徴が確認される。

d ルターの「反技法」としての死への準備

以上、ルターの一五一九年の著作を手がかりに、三つの観点から死への準備に関する中世後期の理解とルターの理解との共通点と相違点とを確認してきた。不安の強調、私たちの外にある救いへの関わり、そしてサクラメントの積極的な効用への言及という点において、ルターは中世後期の「死の技法」の語りを継承している。しかし、ルターの一五一九年の説教に、従来の「死の技法」の協働的モデルとの決定的な断絶が見られた。ハムの言葉を引用すれば、中世後期の「死の技法」に対して、ルターによる「祝福された死の〈反技法 (Antikunst)〉⁽¹²⁾という宗教改革的な類型の基礎が築かれた。中世後期の死生観において、道徳的完全化プロセスの完成の頂点としての臨終への集中が、この世を空虚なものとして軽視する態度をもたらしていた。そこには、「臨終の時」に焦点が当てられた「生から死へ」、さらには「死後の生へ」という方向性だけが重視されている。ルターもまた、「生から死へ」と向かう人間存在とその不安の問題を考察している。しかし、ルターの場合、私たちの外にある (extra nos) 神の恵みと、こゝへ全面的に委ねる信仰によって、信仰者は全人生を規定しようとする死の不安の力

の圏域から解放される。ルターは、十字架のキリストの中に「死から生へ」と転回される自己を見いだすと述べている。こうして死ぬべき生は、その死をも含めて喜びをもって生きられる祝福された生となる。「死を喜んで迎える」ということによつて、このような死の支配から解放された人間の生の新しい⁽⁴³⁾あり方が示されている。また、ルターが、いまにも死を迎えようとしているときは死を見つめるのに「不適當な時機」であり、むしろまだ健在な時にそれを行つておくべきであると勧めているとき、⁽⁴⁵⁾彼とつての「死」の問題が、もはや「死の瞬間」とその時に集中して求められる「技法」に特別な仕方で限定されたものではないことを示している。祝福された死の理解は、祝福された生への自覺を促すものとなる。

五 おわりに―現代への問いかけ

キリスト教史全体を通して、「死に臨む」人間の問題、そしてその最後の迎え方や看取り方が常に重要な課題であった。中世に發展した臨終の儀礼、特に悔い改めの儀礼は、自己の内面と心の闇を見つめる場を提供してきた。この場所が、不安の解消だけでなく、不安の増幅にも作用したという問題を指摘し、これらの儀礼を取り除いたとしても、人間がいつの時代も内面の闇の問題、罪の問題を抱えながら生き、そこからの解放を必要としているという問題それ自体が無くなる訳ではない。しかし、現代社会において、人々が安心して自己の心の闇と向き合う場所がどれほど存在しているであろうか。山形にある独立学園で校長を務めていた安積力也は、この国の

子どもたち、青年たちの最大の悲劇は心の闇（封印した未解決問題）を見る意味と勇気を、教えられていないことだと語っていた。⁽⁴⁶⁾さらに、このような場所の喪失が、この国で人格が形成される場や環境が保障されていないことを示している。キリスト教史における様々な臨終をめぐる理論と実践は、人間が安心して自己の内面と向き合う場所を構築し保障する試みの歴史と言えよう。本稿では、その際、「私たちの外（extra nos）」との関係性が一つの焦点になっていることが観察された。そして、そこに、現代社会に生きる人間が抱える問題を乗り越えるための糸口もまた与えられているのではなからうか。

宗教改革から五百年を迎える今日、外面的には、宗教から遠く離れたように思われる世界を生きているため、多くの人は、ルターが悩んだ宗教的問題と関係の無い世界を生きているかと思っているかもしれない。しかし、ルターの時代の人間が経験した、最後の審判と永遠の死の不安という宗教的な枠組みの中で経験された、究極的な存在の根拠をめぐる問題は、現代では、表面的には宗教とは直接関係ないと思われている、世俗化した社会の枠組みの中で経験されているように思われる。例えば、日常の社会的関係や経済の原理が絶対視され、社会の要求に常に応えるための自己形成や自己評価を強制されるとき、自己の存在の意味や価値の喪失、さらには、尊厳の喪失の危機にさらされている。このような現代の観察から、私たちは相変わらず、しかも切実に、ルターが示した人間の側に依拠する世界と神の側（私たちの外）に依拠する世界の、いずれを人間が生きる世界の本質と見なすのか問われている状況に生きている。時代は確かに変化しているが、心の闇と裁きへの恐れを経験、そして、その中で、自己を喪失する経験の中で苦しんでいる人間に、その問題に対抗する力を与えることができるものは、ルターが見出したように、「私たちの外（extra nos）」から無条件に受け容れられていることへの信頼であ

り、そのような関係性ではなからうか。キリストの十字架による無条件の赦しと受け容れという出来事の中で自己を探し求めるならば永遠に自己を見出す、というルターの言葉は、そのような意味で、現代に相変わらず、恐れから解放された人生を生きる根源的な可能性であり続けている。

かつて、オウム真理教が虚構としての世界の破滅を夢見たが、いまや万人が世の破滅を現実の予想としている、と語ったのは社会学者の大澤真幸である。「誰もが、近い将来ほんとうに破局が訪れ得ると知っているからだ。このまま行けば大丈夫、と思っている人はほとんどいない。現状のまま続ければ、日本は、地球は破局的結末の到来を避けられない。労働力不足による福祉制度の根底的崩壊か、極端な格差か、核戦争か、生態系の破壊か、具体像はわからないが、そのいずれかが起こるということは、現実的な予想の中にある。それなのに、私たちは、破局の回避という最小限の条件を満たす理想社会への道すら見出せ^{みいだ}ない。かつて一人の妄想だったことが、今や、万人の予想のうちにある。事態はましになったのか？」⁽⁴⁸⁾。このような死の予感と不安とそこから生じる閉塞感に覆われた現代社会は、「今ここで」の世界の積極的な意義とその世界を生きる力をどのようにして見いだすことができるのであろうか。人間は「この世の生の延長としての永遠の命」を求めて「死と闘う」ことにおいて、ことごとく敗北してきたし、問題の前に立たされながらも、自己と世界それ自体の中に答えを見出すことができずに立ちすくんでいる。

ルターは、「死への準備」の中で死に対抗する勇氣の源泉を問うたとき、「死それ自体において、自分自身において、あるいは自分の性質において」見るならば、そこには破滅しかないということを知っていた。⁽⁴⁹⁾ 現代社会に生きる私たちは、まさにそのような死の経験に直面しているのではないだろうか。「自己自身の中」に、また

「世界それ自体の中」に転換の可能性を探しても見いだすことができず、むしろ、そこからは破滅の予感しか現れてこないという現代のニヒリズム的状况がある。ルターは、死の不安と対峙する中で、自己の中でもなく、世界の中でもなく、もっと根源的な「私たちの外」という関係性に身を開き、そこから自己を確立する転換がどうしても必要になるということに気づいた。そして、この問題に「対抗」できる答えを聖書の中に、キリストの福音の中に見いだした。自己を中心とするのではなく、むしろ、外から来る絶対的に赦し、受容する恩恵の関係性に身を置くことによって、逆説的に、自己とこの世を積極的に評価し、また、積極的に他者と共に生きる態度が生じたこと、また、この神学的思想が宗教改革という一つの社会を新しく形成する運動の推進力となったことを私たちは知っている。存在の根源を脅かすあらゆる恐れから自由な人間が、積極的に他者と共に生き、共に生きる社会の形成に参与し、喜んで奉仕する世界について、ルターは『キリスト教的な人間の自由』の二つの命題において示している⁽³⁰⁾。

かつてドイツ福音主義教会連盟議長を務めたマルゴット・ケースマンは、二〇一四年に死と痛みの問題をルターとの関連で考察した講演で、繰り返しドイツの神学者でありジャーナリストであるハインツ・ツァールントの言葉を引用している。「この世の生の終わりのなき延長に誰が耐えうるだろうか。〔中略〕死を廃止することが、永遠の命ではない⁽³¹⁾」。むしろ、死はそれに相応しい文脈で理解される必要がある。つまり、「死が人間の謎(Rätsel)から神の秘密(Geheimnis)になるとき、私たちは一歩前進し、人間の生活、人生の知恵の最後の段階に到達し、時間的に過ぎ行くものを祝福できるようになる⁽³²⁾」。ケースマンは、このツァールントの言葉を引用した後、「ルターもそこに付け加えることは何もないであろう」と指摘する。ルターの死の経験の記憶と想起は、

宗教改革から五百年たった不安の時代に、自由と希望を持って生きるための重要な問いかけと、確かな方向性を与えてくれるのではないだろうか。ルターがその神学の土台としたアウグスティヌスは『告白録』を次のような言葉で始めているが、そこにも神の秘密としての人間の生と死の理解が表現されている。「あなたがかりたてます、あなたを讃えることが喜びであるように、それはあなたがわたしたちをあなたに向けて創られたからです、そのため私たちの心は、あなたのうちに憩うまでは安らぎをえません」⁽³³⁾。

注

- (1) 本稿は、二〇一八年一月一八日に日本福音ルーテル大森教会で開催された「ルター研究所秋の講演会」において、「ルターから今を考える——宗教改革から五〇〇年後の人間の自由と不安と希望」という題目で行われた講演の原稿に加筆修正を施し、まとめたものである。
- (2) ルターが死に臨む様子を記録した報告については、拙著『ルターから今を考える 宗教改革五〇〇年の記憶と想起』日本キリスト教団出版局、二〇一六年（以下『ルターから今を考える』と略記）、第1章「ルターメモリアのはじまり」の中でより詳細に紹介している。
- (3) Justus Jonas und Michael Coelius, Vom christlichen abschied aus diesem tödlichen leben des ehrwürdigen Herrn D. Martini Lutheri, Georg Rhaw, Wittenberg 1546, in: Joachim Bauer, Martin Luther Seine letzte Reise, Gerhard Seichter, Rudolstadt 1996.
- (4) Vgl. Joachim Bauer, op. cit., S.73, 77, 83.
- (5) Ibid., S.85.
- (6) Ulrich Volp (Hg.), Tod, Mohr Siebeck, Tübingen, 2018 (UTB Band 4887) (以下、Volpと略記). 教会史に関わる章は、「一七頁から一六一頁で、Ulrich Volpが執筆担当し、「キリスト教共同体における人間の死 教会史的視点」というタイトルがつけられている。
- (7) ボルプは、キリスト教徒でない人々からキリスト教徒を区別する特徴が、イエス・キリストの受難になぞらえられ、十字架を負う殉教の死であると述べるテルトゥリアヌス（没二二〇年以降）を例に挙げている。Tertullian, De anima 55, 5 in: Volp, S.119.
- (8) Gregor von Nyssa, Vita Macrinae 984B-986C, in: Volp, S.119-120. マクリナは少しずつ弱っていく中で、繰り返し

神に祈り、祈りの後に、手で顔や胸の前で十字を切っていた様子が報告されている。多くの詩編の要素を含むマクリナの祈りは、その後、多くのキリスト教徒が暗誦し、死に臨む時に唱える祈りとして憶えられていった。

- (9) Augustinus, *Epistula* 158, 2, in: Volp, S.120. 詩編八四編三節と詩編二三編五節を誦い、十字を切って息を引き取った様子が描かれており、四世紀のキリスト教的な「良い死」の理想を読み取れるのではないかと考えられている。
- (10) Possidius, *Vita Augustini* 31, 2-6, in: Volp, S.120. アウグスティヌスの死についての報告によれば、死に至る病の中で、彼は悔い改めの詩編をベッドの横の壁に貼りつけ、繰り返しそれらの詩編を眺めて涙を流していた。そして、息を引き取る一〇日前から、食事以外のために部屋に入ることを許さず、生涯の残りの時間を誰にも邪魔されずに神への祈りの時として過ごしたという。

- (11) 洗礼後に生じる罪とその赦しの問題については、例えば、Gustaf Adolf Benrath, Art. Buße V. Historisch, in: TRE7, 1981, S.452-473 を参照。

- (12) Volp, S.121f.

- (13) Volp, S.136.

- (14) Vgl. Volp, S.136.

- (15) Vgl. Volp, S.137. 後の死者ミサ及びトリエント公会議によるローマ・ミサ典礼書については、Volp, S.141 を参照。

- (16) Volp, S.137.

- (17) Volp, S.139.

- (18) Vgl. Bernd Hamm, *Der frühe Luther*, Tübingen 2010, S.115-163 (Kap.5). 後出: Bernd Hamm, *Luthers Anleitung zum seligen Sterben vor dem Hintergrund der spätmittelalterlichen Ars moriendi*, in: *Jahrbuch für biblische Theologie* 19(2004): *Leben trotz Tod*, (Zürcher Theologie-Zentrum Zürich) S.311-362.

- (19) Hamm, S.128.

- (20) Hamm, S.130.
- (21) Hamm, S.130.
- (22) Hamm, S.133.
- (23) Hamm, S.133f.
- (24) Vgl. Hamm, S.139-163.
- (25) 小田部進「ルターにおける死の思想についての一考察」『論叢』玉川大学文学部紀要、第四七号、二〇〇七年、一〇三—一七頁参照。
- (26) 金子晴勇『ルターの宗教思想』（オンデマンド版）日本キリスト教団出版局、二〇〇五年、一三八—一三九頁参照。
- (27) WA 2, 689, 3-6.
- (28) Hamm, S.145.
- (29) Hamm, S.146.
- (30) WA 2, 689, 9, 690, 24.
- (31) WA 2, 689, 30f.
- (32) WA 2, 690, 24f.
- (33) Hamm, S.146.
- (34) WA 2, 694, 2-3.
- (35) WA 2, 692, 30.
- (36) WA 2, 692, 36.
- (37) WA 2, 694, 7-9.
- (38) Hamm, S.153.

- (39) Hamm, S.153.
- (40) WA 2, 694, 11.
- (41) WA 2, 694, 14.
- (42) Hamm, S.161.
- (43) WA 2, 697, 15.
- (44) Vgl. WA 2, 687, 16.
- (45) WA 2, 687, 30.
- (46) 玉川大学父母会主催で二〇一八年一月一日に「〈私〉を表出できない青年達―親に何が問われているのか―」という表題で同大学で行われた安積力也氏による講演会の中で語られた内容からの引用である。
- (47) Vgl. WA 2, 690, 24f.
- (48) 大澤真幸「オウム夢見た虚構の破滅、処刑では消えない今」(朝日デジタル 2018/7/9, 505, 2018/11/17 アクセス https://digital.asahi.com/articles/ASL764DB5L76UCLV00M.html?ref=pc_ss_date)
- (49) 上述 42 a を参照。
- (50) 『ルターから今を考える』、第 4 章「キリスト教的な人間の自由」において二命題の参照。
- (51) Margot Kälbmann, Schmerz und Tod in Luthers Weltbild und was wir daraus lernen können. Vortrag auf dem Deutschen Schmerz- und Palliativtag 2014. (EKD ARTIKEL 14.03.2014, 2019/8/31 アナサス) https://www.ekd.de/20140314_kaessmann_palliativtag.htm Vgl. Heinz Zahrnt, Glauben unter leerem Himmel, München 2000.
- (52) Ibid.
- (53) 宮谷宣史訳『アウグステイヌス著作集 第5巻 I 告白録(上)』教文館、一九九三年、二〇頁。